特集 「東アジア価値観国際比較調査」その2

「一番大切なもの」

—— 東アジア国際比較調査データ分析から幾つかの話題 ——

角 田 弘 子*, 鈴 木 達 三**

The Most Important Thing

—— Several Topics from Analysis of the East Asia Value Survey ——

Hiroko TSUNODA and Tatsuzo SUZUKI

In this paper we present several attempts at data analyses concerning the East Asian peoples' attitudes and social values on the data of our East Asia Value Survey conducted in Japan, China (Beijing, Shanghai, Kunming, Hangzhou), Hong Kong, Taiwan, South Korea, and Singapore during 2002-2004.

Among these, we focused on the response patterns to the open-ended question "What is the most important thing(s) for you?" Although the responses were so various, overall each country or region shows some distinctive features closely related to their own social values.

We also show the relationships between the respondents' attitudes and their answer patterns to items relating to the question, using the data of our East Asia value surveys as well as the previously conducted cross-national survey including European countries and USA.

These results show that the social systems may influence attitudes and values of these people under racial, cultural and geographic diversities and life.

Key words: East Asia value survey, cultural link analysis, open-ended questions, rating method, social values.

キーワード: 東アジア価値観調査, 国際比較調査, 自由回答, 評定法, 社会的価値観

1. は じ め に

人々の価値観を尋ねる自由回答法 (回答者に自由に答えさせ, それを記録する) という形式の質問項目は, 半世紀に及ぶ「日本人の国民性調査」の初回 (1953 年) より調査されている (第 11 次「日本人の国民性」調査委員会, 2004)。第 1 回調査では「あなたの家で一番大

切と思うものはなんですか, 一つだけあげてください (何でもかまいません)」という表現で尋ねており, この調査の初期には「家」についての関心が強かったように推測される。これと関連して, 一般の人々の「家」に対する考え方をみるために作成された質問に「子供がないときは, 血のつながりのない他人の子供を, 養子にとって家をつがせた方がよいと思いますか, それとも, つがせる必要はないと思いますか」という項目がある。この質問の回答肢「つがせる」の回答比率は第 1 回調査では 74% であったが, その後急速に減少し 60 年代には 50%, 90 年代には 22% になり, 継続質問項目全体の中で最も変化の幅が大きい項目となっている。このような変化の兆候にいち早く気がつき, 先の項目は 2 回目 (1958 年) 以降の調査では「あなたにとって, 一番大切なものは…」とした。回答結果をみると

*三重大学大学院医学系研究科 公衆衛生学
(Department of Public Health Graduate School of medicine Mie University)

連絡先: 〒514-8507 三重県津市江戸橋 2-174

E-mail: hirokok-ky@umin.ac.jp

**大学共同利用機関法人 情報・システム研究機構
統計数理研究所

(The Institute of Statistical Mathematics)

連絡先: 〒106-8569 東京都港区南麻布 4-6-7

60 年代には「生命・健康・自分」と分類される回答が一番多く、1968 年まではわずか 13% 程度にすぎなかった「家族」が、それ以後の 35 年間は一貫して「家族」と「子供」を合わせた回答が最も多くなり、90 年代以降は 50% 前後に達した。

本論文では、「ブラジル日系人の意識調査」(林編, 1993b), 「7 カ国国際比較調査」(林・吉野・鈴木・林文・釜野・三宅・村上・佐々木, 1998) や「ハワイ日系人・非日系人国際比較調査」(吉野編, 2001) の結果を参考にしながら、特に、最近遂行された「東アジア価値観比較調査」(吉野編, 2004a, 2004b, 2005a, 2005b, 2005c, 2005d), 「医療と文化の多次的連関に関する統計科学的調査」(山岡, 2005) や「日本・中国の国民性比較のための基礎研究」(鄭編, 2005) (以下、これらを総称して「東アジア価値観調査」と記す) に含まれた、「あなたにとって一番大切なものはなんですか」(自由回答) という質問について得られた回答結果について、回答データの傾向や特徴について触れてみる。同様に「7 カ国国際比較調査」や「日系人比較調査」に含まれる幾つかの質問についても、「人間関係」と「社会に対する価値観」に焦点をあて網羅的ではないが基礎情報について分析した。これにより、日本人や各国の人々の価値観の一端を浮かび上がらせることができるであろう。

2. 調査データと分析方法

用いた調査データと質問項目

調査の対象は、「東アジア価値観国際比較調査」では日本、北京、上海、香港、台湾、韓国及びシンガポール、「医療と文化調査」では台湾と韓国、「日本・中国の国民性比較のための基礎研究」では昆明と杭州の成人男女である。調査が遂行されたのは、日本、北京、上海、杭州(2002 年)、昆明、香港、台湾、韓国(2003 年)とシンガポール(2004 年)である(詳細な調査手続きと集計結果は、吉野[2004a, 2004b, 2005a, 2005b, 2005c, 2005d], 山岡[2005]と鄭[2005]を参照)。これら 3 つの調査のうち、「医療と文化調査」のみ、本来の目的が医療や健康感関連の調査であり、他の 2 つの一般的な社会意識調査とはかなり異なる調査項目が多いのであるが、3 つの調査で共通項目があるので利用する。各国・地域ともそれぞれの社会事情に応じた統計的無作為標本抽出した調査対象への個別面接法を用いている。

自由回答質問「一番大切なもの」の回答のカテゴリ分類について

対象者の回答を、「日本人の国民性」調査(“大切なもの”キーワード辞典(第 4 版))の分類を参考に、事後的に 5 個のカテゴリ、「生命・健康・自分」、「家族」、「愛情・精神」、「その他」及び「DK」に分類した(分析に用いた質問項目は付表参照)。

3. 「一番大切なもの」の比較

3.1. 東アジア調査の結果

図 1 は、2002 年から 2004 年にかけて行われた「東アジア価値観調査」の自由回答の結果である。概観すると、各国・地域の中で「一番大切なもの」を「家族」と回答した比率が最も高いのは韓国 54.5%、日本 53.1%、シンガポール 33.8% となっている。「日本人の国民性調査」によると、日本の場合、自由回答法による 80、90 年代の「家族や子供」の回答比率は 40~50% であり、今回の 2002 年日本調査においても第 1 位である。「生命・健康・自分」についてみると、高い比率を示すのは昆明 56.2%、北京と上海が 55.1%、香港 54.8%、杭州 53.8% となっており、中国本土及び香港では 50% 以上となった。各国・地域間の比較において「愛情・精神」の比率が高いのは、台湾 15.6%、北京・シンガポール 13.7%、上海 10.8% である。

3.2. 自由回答と 7 段階評価法の質問形式の効果の比較

「一番大切なもの」を尋ねる項目は、日常、一般の人々がどのようなことを気かけながら過ごしているのかを知るという目的で用いられているが、質問の形式と

図 1. 自由回答「一番大切なもの」(回答のパーセントを示す)

表 1. 様々な生活領域に関する質問（数値は7ポイントのうち評価7（重要）のパーセントを示す）

生活領域	1988 日本	1992 イタリア	1987 フランス	1987 西ドイツ	1993 オランダ	1987 イギリス	1988 アメリカ	1988 ハワイ 日系人	1991 ブラジル 日系人	1999 ハワイ 日系人	1998 西海岸 日系人
家族や子供	82.6	90.4	80.1	66.9	80.1	88.9	91.6	89.4	90.3	96.6	89.8
職業や仕事	54.6	30.8	43.5	12.0	16.1	26.4	29.8	32.2	78.9	24.3	26.5
余暇・くつろぎ	31.2	21.9	25.8	27.0	29.2	21.5	27.0	31.1	32.8	25.7	39.0
友人・知人	39.4	27.7	24.7	29.0	34.4	26.7	36.0	35.0	59.8	36.9	42.7
両親、兄弟、 姉妹、親戚	58.1	63.8	44.1	33.6	46.5	52.6	62.3	66.1	86.8	74.3	75.0
宗教	13.8	25.8	11.9	9.4	14.8	13.8	47.2	24.4	51.9	28.2	17.4
政治	18.2	6.1	5.0	5.9	5.6	6.0	12.2	7.2	24.2	5.8	2.9

生活領域	2002 日本	2002 北京	2002 上海	2003 昆明	2002 杭州	2003 香港	2003 台湾	2003 韓国	2004 シンガポール
家族や子供	80.1	84.5	81.2	82.3	81.7	67.9	79.4	87.4	85.3
職業や仕事	44.9	47.0	47.2	55.8	52.6	31.8	42.8	66.9	47.9
余暇・くつろぎ	36.2	22.5	16.8	30.9	32.5	24.4	35.5	55.1	40.8
友人・知人	38.8	24.5	19.6	36.0	35.8	20.0	24.7	54.8	40.8
両親、兄弟、 姉妹、親戚	57.2	57.3	54.8	63.7	63.8	51.1	53.7	76.2	72.5
宗教	8.0	2.6	3.5	7.8	7.8	9.5	12.3	22.7	40.1
政治	16.0	15.3	8.3	20.5	15.6	3.0	5.3	21.0	9.3

しては自由回答法でも、評定法でも目的を達成することはできる。自由回答法では、回答結果を整理するとき事後の分類基準（2節参照）がしばしば問題になり、少し異なる基準で再分類をすると結果が大きく変動する場合もあり得る。一方、十分に幅広い分野の事項を考慮して選択枝方法や評定法でデータを収集するには、取り上げる項目の選択などあらかじめ十分な検討が必要となる。

表1は7つの生活領域における分野や事柄について、「あなたが重要だと思う程度に従って、1（重要でない）から7（重要）の7点満点で評価をつけて下さい」という質問に対する回答結果について、評価7（重要）の回答選択率を示す。

日本は7つの分野の中で「家族・子供」に7点（重要）をつけた人の比率は1988年調査では82.6%、2002年調査では80.1%で他の領域を大きく離して1番高い。従って、自由回答法、7ポイント評定法のどちらの方法でも概観では同様の結果を得ている。次に、1988年と2002年で7分野の回答傾向の変化をみると、「職業や仕事」を7点（重要）とする比率が減少し、「余暇・くつろぎ」を7点（重要）とする比率がやや増加して

図 2. 生活領域に関する質問（数値は1～7ポイントのうち評価7（重要）のパーセントを示す）

いるが、大方は約14年間を経ても急激な変化はなく、ほぼ一定の形を保持しており、安定したパターンを確認することができる（図2）。

3.3. 各国・地域の共通性と特色について

前節で述べた生活領域の重要性については、7ポイント評定法による多くの国々・地域の調査結果が得られており、表1には7カ国調査及びハワイ日系人調査（林編, 1993a）、（吉野編, 2001）ブラジル日系人調査（林

編, 1993b), アメリカ西海岸日系人調査(吉野編, 2000), 東アジア価値観調査の結果が並記してある。各国のデータを比べてみると, 7 カ国調査, 日系人調査ではどの国 (社会) でも「家族・子供」が 1 位で「親族 (両親, 兄弟, 姉妹, 親戚)」が 2 位という特徴があり, 家族や身内がまず大事というのが洋の東西を問わず各国の人々の共通の考え方ということになる。そして, 3 位以下になると各国 (社会) 固有の特徴が現われているようにみえる。日系人の結果をみると, ハワイ日系人も米本土西海岸日系人も他の面で日系人以外のアメリカ人と同じようにみえる場合も多いが, 「宗教」に対する評価については, アメリカ的ではなくどちらかといえば日本的な色彩が残っているようである。さらに, 韓国, シンガポールでは, 他の東アジアの国々と比べて宗教を 7 点「重要」と位置づける人の率が高く (それぞれの回答は 22.7%, 40.1%), 香港, 台湾においては, 中国本土よりは「宗教」を重要とする人の率が高い (それぞれ 9.5%, 12.3%)。一方, 「政治」の部分を見てみると, 7 点「重要」とする人の割合は香港, 台湾やハワイ日系人は宗教の重要度に比べると, 低い傾向 (それぞれ 3%, 5.3%, 7.2% [1988], 5.8% [1999]) を示している。

4. 質問順や文脈による影響

ここでは, 日本人の義理人情に関係すると言われる「入社試験」の質問項目 (付表参照) について, この事象 (試験の成績と採用) に各国の特徴が現われるので, 取り上げてみることにする。質問文は, A, B が一つの組となっており, A → B の順に質問している。各国の調査結果をみると, 表 2 のようになる。

日本におけるこれまでのいろいろな比較実験調査で, この質問項目の組は質問の順を A → B から B → A と変えると「1 番の人を採用」の回答比率が変化することが知られている。これは Schuman (1991) らのいう Context effects (質問の順や文脈, 前後関係による影響) に類似しており, 回答比率が質問順や文脈による影響を受ける具体例となることが確かめられている (鈴木, 1995, 2000, 2001)。

先述の日米欧の 7 カ国調査, 海外日系人調査と東アジア価値観調査では, いずれも A → B の順に質問されている。「1 番の人を採用する」という回答比率が A, B 両質問で大きく相違するのはブラジル, 米本土西海岸日系人及び東アジア地域となった。

より詳細には, 先行質問 A に対比して B の回答を考え意見を変える (B では「1 番」が少なくなる) のは

表 2. 「入社試験どちらを採用するか (質問順は A → B)」 (回答のパーセントを示す) 回答肢 (8) 「その他」 (9) 「わからない」については省略

		1988 日本	1992 イタリア	1987 フランス	1987 西ドイツ	1993 オランダ	1987 イギリス	1988 アメリカ	1988 ハワイ 日系人	1991 ブラジル 日系人	1999 ハワイ 日系人	1998 西海岸 日系人
A (前)	[1] 1 番の人	60.4	67.3	58.8	44.5	60.6	72.6	65.9	68.3	75.6	63.6	74.1
	[2] 親戚の人	22.8	24.7	34.9	39.8	28.5	21.3	29.5	26.7	16.2	26.2	23.3
B (後)	[1] 1 番の人	40.6	62.9	50.2	36.2	68.2	68.6	64.9	51.7	50.3	58.3	57.0
	[2] 恩人の子	42.3	27.6	43.2	46.9	19.4	23.9	30.4	42.2	42.3	31.6	40.1
	A[1]-B[1] [%]	19.8	4.4	8.6	8.3	-7.6	4.0	1.0	16.6	25.3	5.3	17.1
	B[2]-A[2] [%]	19.5	2.9	8.3	7.1	-9.1	2.6	0.9	15.5	26.1	5.4	16.8
		2002 日本	2002 北京	2002 上海	2003 昆明	2002 杭州	2003 香港	2003 台湾	2003 韓国	2004 シンガポール		
A (前)	[1] 1 番の人	67.3	79.2	79.0	70.9	60.2	66.2	70.4	77.3	73.5		
	[2] 親戚の人	18.8	15.9	18.7	17.7	23.5	30.5	20.6	19.5	18.0		
B (後)	[1] 1 番の人	44.1	59.3	54.4	57.4	47.4	46.7	52.9	55.2	55.3		
	[2] 恩人の子	39.9	35.7	43.2	30.6	37.2	48.4	38.4	41.1	36.5		
	A[1]-B[1] [%]	23.2	19.9	24.6	13.5	12.8	19.5	17.5	22.1	18.2		
	B[2]-A[2] [%]	21.1	19.8	24.5	12.9	13.7	17.9	17.8	21.6	18.5		

東アジア、日本及び日系人に多い。それとは逆にオランダはBの方「1番の人を採用」が増加している。このことは、「入社試験で1番の人を採用する」といういわば「社会的にみた公正さ」という考えと、「親戚」あるいは「恩人の子」という身近な人間関係における判断がそれぞれの社会や文化で相違していることが、これらの回答パターンに現われていると考えられる。

日本では、先述の「日本人の国民性」調査の結果によると、1963年からの40年間、A、B両質問項目の「1番の人を採用」の比率の差は20～25%で安定している。これからみるとAB両質問項目について質問Aを先に、質問Bを後に質問した時の「1番の人を採用」と回答する比率は、A、B両項目で大きく変化するのはヨーロッパ・アメリカと対比した時、日本人の特徴の一つと考えられる。米本土西海岸の日系人、ブラジルの日系人の差をみると、日系人にもまだ日本人の特徴ともいえるこの傾向が残っている（伝播、保持されている）とみられ、また東アジアではこの傾向が欧米に比べ強く現われるようである。従って、この特徴（恩人に対する義理人情の感覚）は、日本の特徴というよりも東アジアの特徴といえるのであろう。

（義理人情）は日本人（日系人）や東アジアの人々との特徴とであることを確認した。身近な生活領域で7点「重要」の比率が2位であった「両親、兄弟、姉妹、親戚」は欧米も含む各国共通の結果であるから、「両親、兄弟、姉妹、親戚」はどこでも相応に大切にされていることになるのだが、それ以上に日本(日系)、東アジアでは「恩人の子」（助けてくれた人に感謝・援助する）を重くみる考えが入ってくる。これは「大切な道徳」の質問（「親孝行」「恩返し」「権利」「自由」の中から2つ選択（付表 問23）で「恩返し」の選択回答比率が日本も他の東アジアの国や地域及びイギリスを除く欧米の国々よりも高いことと関連するかもしれない（表3）。あるいは、この関連を日系人調査データでみると、ハワイ日系人に比べて「恩返し」の選択比率のやや高くなっているブラジル日系人や米本土西海岸の日系人が日本人同様に回答比率の変化を示しているのは興味ある結果といえる。

義理人情をめぐる回答を通して、日本人や日系人と東アジアには、一見複雑に見える人間関係のあり方がうかがえる。しかし、この辺りの価値観や態度が人間のもつ攻撃性を和らげ、人間同士の直接的な衝突を回避させることに役立っているのかもしれない。

5. 義理人情をめぐる回答

前節で、「恩人の子」を「親戚」より重くみる考え方

表3. 「大切な道徳」（回答のパーセントを示す）
回答肢(8)「その他」(9)「わからない」については省略

	1988 日本	1992 イタリア	1987 フランス	1987 西ドイツ	1993 オランダ	1987 イギリス	1988 アメリカ	1988 ハワイ 日系人	1999 ハワイ 日系人	1998 西海岸 日系人	1991 ブラジル 日系人
親孝行・親に対する愛情	77.7	78.6	52.4	55.0	66.5	63.4	69.4	78.3	79.1	71.8	82.3
助けてくれた人に感謝、援助	56.8	30.2	38.2	15.0	14.6	49.6	27.6	22.8	16.0	33.4	42.4
個人の権利	25.2	46.9	47.8	65.9	58.9	46.4	62.3	72.2	69.9	63.7	33.6
個人の自由	32.8	42.3	57.7	57.4	55.3	36.1	33.1	25.6	28.6	30.2	32.5
	2002 日本	2002 北京	2002 上海	2003 昆明	2002 杭州	2003 香港	2003 台湾	2003 韓国	2004 シンガポール		
親孝行・親に対する愛情	77.4	87.9	89.4	86.4	85.7	80.2	89.5	84.4	90.3		
助けてくれた人に感謝、援助	58.6	56.5	55.9	56.4	54.7	44.9	61.5	51.1	53.6		
個人の権利	25.5	32.2	34.9	29.9	32.4	29.2	25.8	30.9	32.8		
個人の自由	33.9	23.4	19.5	24.9	24.1	43.4	20.2	28.2	21.2		

6. 信 頼 感

1990年代以降、「信頼」に対する関心が急激に高まり、その理由のひとつとして、アメリカに代表される西欧社会における信頼崩壊に対する危機意識がある。Putnam (1995)は、信頼感を「ソーシャル・キャピタル (social capital)」と考え、それが効率的な経済と政治の運営に及ぼす重要性を指摘した上で、米国のGSS (一般社会意識調査)に表れたアメリカ人の一般的信頼の水準が過去20年間にわたって次第に低下していることに人々の注意を促している。

GSSには時系列調査データが収積されており、その中には以下の「信頼感」を尋ねる3項目が含まれている(問26 他人のためか自分のためか 問27 スキがあれば利用されるか 問28 人は信頼できるか)。これらの項目は、対人的「信頼感」尺度を作成するためにその構成が試みられ、日本では「日本人の国民性調査」に1978年から加えられた。

このなかで、楽観的回答の割合をみたものが、図3である。たとえば、問28「人は信頼できるか」に対する回答パターンは、各国においてかなりの差異が認められる。回答を額面通りとったとすれば、オランダやアメリカは基本的には他人に信頼をおいている。反対に、イタリア及びフランスは他人に対して不信感が強い。同じヨーロッパ大陸でも、ドイツ・イギリスとイタリア・フランスは異なる結果となった。他方、東アジアでは台湾や香港の不信感が目立つ。問28だけをみると、東アジアのなかでは、日本人が人を信頼する傾向

図3. 「信頼感」の楽観的回答(問26と問28は回答肢「1」、問27は回答肢「2」のパーセントを示す)

国は問28回答肢「1」の順に並べた。

日本①は1988年、日本②は2002年調査(他の調査年は表1参照)

がみられる。それとは逆に、問26「他の人の役にたとうとしている」では、北京・杭州・上海(それぞれ61.6%, 60.7%, 58.9%)の楽観的回答の割合に比べ、日本①(1988年)と日本②(2002年)(それぞれ31.2%, 35.8%)は低いことがわかる。これについては、本節で後述する問題に関係している可能性がある。

日本人の「信頼感」に関連して、林(1996)は質問文による回答の変化について注目し、頭つき調査(質問をそのまま実施)と頭なし調査(基本質問の下線部を削除)の結果を比較している。

質問①(問26) 他の人を手助けしようとしている人もいますが、自分のことだけに気をくばっている人もいます。あなたのまわりを見たとき、たいていの人は他人の役にたとうとしていると思いますか。それとも、自分のことだけに気をくばっていると思いますか。

- 1 他人の役にたとうとしている
- 2 自分のことだけに気をくばっている
- 3 その他()
- 4 D.K

質問②(問27) スキがあれば利用しようとしている人もいますが、そうでない人もいます。あなたのまわりと見たとき、たいていの人はスキがあれば、あなたを利用しようとしていると思いますか。それとも、そんなことはないと思いますか。

- 1 利用しようとしていると思う
- 2 そんなことはないと思う
- 3 その他()
- 4 D.K

質問③(問28) 信頼できる人もいますが、用心した方がよい人もいます。あなたのまわりを見たとき、たいていの人は信頼できると思いますかそれとも用心するにこしたことはないと思いますか。

- 1 信頼できると思う
- 2 用心するにこしたことはないと思う

図4. 質問文による回答の変化(楽観的回答のパーセントを示す)

3 その他 () 4 D.K

実際に調査すると、頭なしの質問の場合と頭つきの質問で、回答の率に相異がみられる(図4)。いずれも、頭つきの質問の場合、質問②、③は楽観的な回答の率が大幅に増える。文頭に偏りを与える誘導とは思えないような文章が置かれることによって、回答に差が出ているのはなぜだろうか。頭の文がない場合、人間を悪くみる方、つまり人間が信用できないという事例が頭に浮かぶことに注意が向かうため、日本人は悲観的な方へ回答する傾向があるのかもしれない。物事の両方の側面を提示したうえでどちらかを選択させる形式では、楽観的な面にも目が留まり、物事の両面を思い浮かべることによって判断できる可能性がある。このことは、データそのものの比率よりもデータが出てくるそのメカニズムという点に注意を払って考えるべき問題があることを示唆している。

一方で、質問③「人は信頼できるか」のように、「頭なし」の質問文でも質問①、②に比較すると楽観的回答が増加している項目もある。このように、文脈以外の影響によっても回答傾向が変化していくことも考えられる。山岸(1999)は、アメリカ人の方が日本人よりも一般的信頼の程度が高いとしている。しかし、質問③の楽観的回答についてみると、日本は39.1%(1998年)、40.5%(2002年)となり、アメリカの42.4%(1988年)との差は少ない。さらに、1988年から約14年

経過した2002年調査をみると、若干ではあるが、3項目の楽観的回答の割合はわずかながら増加もしくは横ばい傾向であることが確認できる。

以上は対人的信頼感についてのみ言及したが、Yoshino(2005)によると、国際間の信頼感の研究では、例えば反日問題で揺れ動く日中、日韓の間でも、「もし生まれ変わるとしたら、自国以外のアジアの国(地域)の中では、どの国(地域)で生まれたいですか。一つだけ選んでください」という質問において、韓国では、生まれたい国が「日本」という回答が最も高く、中国でも「シンガポール」や「香港」に次ぐ率となる。このように、対人関係も対国際関係も単純な一次元のものさしでは測り難いことがわかる。

本節では、対人的信頼感についてみてきたが、信頼感の測定については同じ表現の質問でも国によっては意味が大きく異なる可能性もあり、社会・文化的背景を考慮すべきとの指摘がある(角田・吉野, 2005; 吉野, 2005)。現在、OECD(Healy & Cote, 2001)においても、ソーシャル・キャピタルの国際比較のための測定手法の枠組みが開発中であるが、人々の「信頼感」を測定するには、やはり文化的背景を考慮した設問方法、測定方法を考える必要があろう。

表4. 科学文明観

	日本①	ドイツ	フランス	イギリス	アメリカ	イタリア	オランダ		
※問29a 近代医学にたよらぬ方がよいものがある	71.6	77.2	62.1	75.7	71.6	49.4	70.3		
※問29b 科学で人の心がわかる	13.8	34.4	64.7	49.7	57.8	52.3	32.0		
※問29c 科学で社会経済問題解決できる	15.1	44.0	49.3	42.8	46.9	52.3	35.2		
	日本②	北京	上海	昆明	杭州	香港	台湾	韓国	シンガポール
問41j 科学技術を信頼するか	73.4	97.1	97.1	95.2	90.2	84.2	76.3	77.8	87.2
問29a 近代医学にたよらぬ方がよいものがある	67.7	67.8	59.5	63.3	63.5	73.2	71.2	70.5	84.6
問29b 科学で人の心がわかる	11.4	39.3	31.7	30.7	44.4	34.0	45.2	27.5	56.4
問29c 科学で社会経済問題解決できる	10.5	55.0	44.3	43.0	49.6	36.5	44.5	39.3	55.8

※但し、7カ国比較調査では問番号が異なる

問29a, b, c「全くそのとおりだと思う」と「そう思う」を合計した率を示す

問41j「非常に信頼する」と「やや信頼する」と合計した率を示す

日本①は1988年、日本②は2002年調査

7. 科学文明観

信頼感があるとは、人間に対する楽観的な態度をすることである。では、社会に対する楽観的態度はどのような視点からみるべきなのであろうか。東アジアのデータの中には、「科学技術を信頼するかどうか」という科学文明観に関する項目と未来の社会状況についての項目がある(付表参照)。表4にある科学文明観に関する結果をみると、東アジア各国の場合は、問41j「科学技術を信頼するか」に対して、70%以上の人々がポジティブな回答を示している。けれども、日本の場合、約14年前よりも問29の回答の割合が低下しており、問29b「科学で人の心の問題を解決する」ことについては、悲観的になることがわかる。人の心が関係していることになると、科学が踏み込めないという意見が強い。特に、問29cの「社会的問題のほとんどは科学技術の進歩により解決される」については、10.5% (2002年)で他の国々と比較すると極端に低い。しかしながら、一般的な事象に関しては「科学を信頼する」という日本人の特徴が表れている。

他方で、北京・上海 (97.1%) における、中国の科学技術に対する高い信頼は特筆すべきことである。また、問29a「近代医学にたよらぬ方がよいものがある」にみられるように、近代 (西洋) 医学の進んだドイツ・イギリス・アメリカより、中国本土では近代医学に信頼をよせている。東洋医学の長い歴史を持つ中国と近代 (西洋) 医学に頼らないとするドイツやアメリカとの逆説的な対比は興味深い。

8. おわりに—比較研究への一つの展望—

本稿では特に自由回答質問の「一番大切なもの」に着目して東アジアの国・地域を中心とし、さらに、これまでの調査 (7カ国国際比較調査、日系人調査) などの基本的な情報にも触れ、他の質問項目の回答分析とあわせて比較研究の一つの方向性を探った。

比較研究は、一面的に行っただけでは十分ではなく、日本人に即した質問票、日本以外の各国の人に即した質問票を、それぞれ特定の意図された軸をもとに構成し、そうした質問票をあわせ用いて調査を進め、その結果を詳細に比較検討することが第一に大切なこととなる (林・鈴木・西平・野元, 1973)。これにとどまらず、我々が分析して導く結論、外国人研究者が同じものを分析して導く結論を付き合せ、相違の全体構造が

一層明確なものになってくるものである。

また、東アジア価値観調査を通して、欧米との比較を振り返り、以下の言葉に示される世界観が垣間見られた。「計量的方法は、日本人とても一様ならず、外国人とても一様ならず、ヨーロッパは一つにならず、アジアは一つにならず、しかし一様ではないままに大局的に似ているところ、異なっているところの筋を客観的に、つまり彼我ともに理解し合える科学的方法によって見通すことを考えるのである」(林・鈴木 1997, p 2)。

今後、積み重ねられた国際比較調査の基礎情報をもとにして、各国の人々の「考え方の筋道」を明らかにするため行動計量学的方法を駆使して、新たな観点からの議論を進めていくことが重要であろう。

謝 辞

本論文は、鈴木(2004)をもとに、基盤研究 A (2) (課題番号 14252013 代表 吉野諒三)、及び基盤研究 (B) (2) (課題番号 14402043 代表 山岡和枝) により得られたデータを、角田が研究協力者として活用させていただいた分析結果の一部をまとめたものである。この過程で編集長及び匿名審査員の方々には貴重なご助言をいただきました。ここに感謝の意を表します。

参 考 文 献

- 第11次日本人の国民性調査委員会 (2004). 国民性の研究第11次全国調査—2003年全国調査—. 統計数理研究所・研究リポート 92, 統計数理研究所.
- 林知己夫 (1996). 日本人らしさの構造. 東洋経済新報社.
- 林知己夫, 鈴木達三, 西平重喜, 野元菊雄 (1973). 比較日本人論. 中公新書.
- 林知己夫 (編) (1993a). 意識の国際比較方法論の研究: 連鎖的比較方法の確立とその展開—1988年ハワイ・ホノルル市民調査—. 統計数理研究所研究リポート 70, 統計数理研究所.
- 林知己夫 (編) (1993b). ブラジル日系人の意識調査—1991~1992—. 統計数理研究所研究リポート 74, 統計数理研究所.
- 林知己夫, 鈴木達三 (1997). 社会調査と数量化 (増補版). 岩波書店.
- 林知己夫, 吉野諒三, 鈴木達三, 林 文, 釜野さおり, 三宅一郎, 村上征勝, 佐々木正道 (1998). 国民性七か国比較. 出光書店.
- Healy, T. & Cote, S. (2001). *The Well-Being of Nations: The Role of Human and Social*

- Capital, Education and Skills*. Organization for Economic Co-operation and Development. Paris. (日本経済調査協議会 [2002] 訳『国の福利：人的資本及び社会的資本の役割』OECD教育イノベーションセンター報告書)
- Putnam, RD. (1995). Bowling alone: America's Declining Social Capital. *Journal of Democracy*, 6, (1), 65-78.
- Schuman, H. (1991). "Context Effects: State of the Past/State of the Art". In N. Schwarz & S. Sudman (eds.), *Context Effects in Social and Psychological Research*, Springer-Verlag, Chapter 2, 5-20.
- 鈴木達三 (1995). 調査法に関する一考察—質問の順や文脈、前後関係による影響 (Context Effects). *ESTRELA*, 7, 8-15.
- 鈴木達三 (2000). 質問の仕方の違いによる回答への影響 (1). 新情報, 83, 10-18.
- 鈴木達三 (2001). 質問の仕方の違いによる回答への影響 (2). 新情報, 84, 16-22.
- 鈴木達三 (2004). 「一番大切なもの」—国際比較調査からの二、三の話題—. 学際, 12, 13-22.
- 角田弘子, 吉野諒三 (2005). 健康満足度に及ぼす人間関係における信頼感の影響. 日本行動計量学会第33回大会発表論文抄録集, 88-90.
- 山岸俊男 (1999). 安心社会から信頼社会へ—日本型システムの行方—. 中公新書.
- 山岡和枝 (2005). 「医療」と「文化」の多次元の連関に関する統計的研究. 平成14~平成16年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(2))研究成果報告書.
- 吉野諒三 (2004). 「国民性」の調査—計量的文明論の確立に向けて—. 学際, 12, 6-12.
- 吉野諒三 (2005). 富国信頼の時代へ—東アジア価値観国際比較調査における「信頼感」の統計科学的解析—. 行動計量学, 32(2), 147-160.
- Yoshino, R. (2005). The Trust of East Asia—cultural manifold of attitudes are values of Japanese, Chinese, South Korean, Taiwanese, and Singaporean.—*Proceedings of the 37th world congress of International of Institute of Sociology*. Sweden.
- 吉野諒三(編) (2000). 国民性に関する意識調査データに基づく文化の伝播変容のダイナミズムの統計科学的解析. 統計数理研究所, 研究リポート 84, 統計数理研究所.
- 吉野諒三(編) (2001). 文化の伝播変容の統計科学的研究—ハワイの日系人・非日系人国際比較調査—. 統計数理研究所, 研究リポート 86, 統計数理研究所.
- 吉野諒三(編) (2004a). 東アジア価値観国際比較調査—「信頼感」の統計科学的解析—. 2002 年日本調査報告書. 統計数理研究所研究リポート 91, 統計数理研究所.
- 吉野諒三(編) (2004b). 東アジア価値観国際比較調査—「信頼感」の統計科学的解析—2003 年中国(北京・上海・香港)調査報告書. 統計数理研究所. 韓国調査報告書. 統計数理研究所.
- 吉野諒三(編) (2005a). 東アジア価値観国際比較調査—「信頼感」の統計科学的解析—2003 年台湾調査報告書. 統計数理研究所.
- 吉野諒三(編) (2005b). 東アジア価値観国際比較調査—「信頼感」の統計科学的解析—2004 年日本 A 調査報告書. 統計数理研究所.
- 吉野諒三(編) (2005c). 東アジア価値観国際比較調査—「信頼感」の統計科学的解析—2004 年日本 B 調査報告書. 統計数理研究所.
- 吉野諒三(編) (2005d). 東アジア価値観国際比較調査—「信頼感」の統計科学的解析—2004 年シンガポール調査報告書. 統計数理研究所.
- 鄭躍軍(編) (2005). 日本・中国の国民性比較のための基礎研究—中国杭州市と昆明市における意識調査—総合地球環境学研究所, 研究リポート 01.

(2005 年 11 月 30 日受付, 2006 年 1 月 20 日最終修正)

付 表：本稿で用いた質問（問番号は東アジア調査票より）

問 12 〔カード 8〕 次にあげる生活領域のそれぞれについて、あなたが重要だと思う程度に従って 1～7 の評価をつけてください。

	重 要 で な い							重 要	そ の 他	わ か ら な い (該 当 せ ず)
a. まず、「あなた自身の家族や子供」についてはどうですか。…	1	2	3	4	5	6	7	8	9	
b. では、「職業や仕事」についてはどうですか。……………	1	2	3	4	5	6	7	8	9	
c. では、「自由になる時間とくつろぎ」についてはどうですか。…	1	2	3	4	5	6	7	8	9	
d. では、「友人、知人」については ……………	1	2	3	4	5	6	7	8	9	
e. では、「両親、兄弟、姉妹、親戚」については ……………	1	2	3	4	5	6	7	8	9	
f. では、「宗教」については ……………	1	2	3	4	5	6	7	8	9	
g. では、「政治」については ……………	1	2	3	4	5	6	7	8	9	

問 23 〔カード 15〕 つぎのうち、大切なことを 2 つあげてくれといわれたら、どれにしますか。

	あ り	な し
a. 親孝行、親に対する愛情と尊敬……………	1	0
b. 助けてくれた人に感謝し、必要があれば援助する……………	1	0
c. 個人の権利を尊重すること……………	1	0
d. 個人の自由を尊重すること……………	1	0
8 その他（記入 ……………）		
9 わからない		

（上の質問では、2 つの項目をあげてもらうこと）

問 24a. 〔カード 16〕 あなたが、ある会社の社長だったとします。その会社で、新しく職員を 1 人採用するために試験をしました。入社試験をまかせておいた課長が、「社長のご親戚の方は 2 番でした。しかし、私としましては、1 番の人でも、ご親戚の方でも、どちらでもよいと思いますがどうでしょうか」と社長のあなたに報告しました。あなたはどちらをとれ（採用しろ）といえますか。

- 1 1 番の人を採用するようにいう
- 2 親戚を採用するようにいう
- 8 その他（記入 ……………）
- 9 わからない

b. 〔カード 17〕 それでは、この場合 2 番になったのがあなたの親戚の子供でなくて、あなたが昔世話になった人の子供だったとしたら、あなたはどうしますか。（どちらをとれといえますか）

- 1 1 番の人を採用するようにいう
- 2 昔世話になった人の子供を採用するようにいう
- 8 その他（記入 ……………）
- 9 わからない

問 26 たいていの人は、他人の役にたとうとしていると思いますか、それとも自分のことだけ考えていると思いますか。

- 1 他人の役にたとうとしている
2 自分のことだけ考えている
8 その他（記入）
9 わからない

問 27 他人は、機会があれば、あなたを利用しようとしていると思いますか、それともそんなことはないと思いますか。

- 1 他人は機会があれば利用しようとしていると思う
2 そんなことはないと思う
8 その他（記入）
9 わからない

問 28 たいていの人は信頼できると思いますか、それとも、常に用心した方がよいと思いますか。

1	2	8	9
信頼できる
と思う	常に用心した
方がよい	その他
(記入)	わからない

問 29 〔カード 19〕 つぎに読みあげる事柄についてあなたはどのように思いますか。それぞれについて、この中からお答えください。(a～d についてそれぞれ聞く)

a. 病気の中には近代医学とは別の方法で治療した方がよいものもある。

1 全くそのとおりだと思う	4 決してそうは思わない
2 そう思う	8 その他（記入）
3 そうは思わない	9 わからない

b. 科学技術が発展すれば、いつかは人間の心の中までも解明できる。

1 全くそのとおりだと思う	4 決してそうは思わない
2 そう思う	8 その他（記入）
3 そうは思わない	9 わからない

c. 今日、我々が直面している経済的、社会的問題のほとんどは科学技術の進歩により解決される。

1 全くそのとおりだと思う	4 決してそうは思わない
2 そう思う	8 その他（記入）
3 そうは思わない	9 わからない

問 38 あなたにとって一番大切と思うものはなんですか。（もし回答者が複数あげた場合は、すべて記す）

(記入)

9
わからない

問 41 〔カード 24〕 あなたは、次にあげる組織や制度、事がらをどの程度信頼しますか。「非常に信頼する」「やや信頼する」「あまり信頼しない」「全く信頼しない」のいずれかでお答え下さい。(1 つずつ○印)

- | | 非常に
信頼する | やや
信頼する | あまり
信頼しない | 全く
信頼しない | わから
ない |
|------------------|-------------|------------|--------------|-------------|-----------|
| a. 宗教団体…………… | 1 | 2 | 3 | 4 | 9 |
| b. 法律や裁判の制度…………… | 1 | 2 | 3 | 4 | 9 |
| c. 新聞・テレビ…………… | 1 | 2 | 3 | 4 | 9 |

d. 警察.....	1	2	3	4	9
e. 国の行政.....	1	2	3	4	9
f. 国会.....	1	2	3	4	9
g. NPO・NGO（非営利団体や非政府組織）.....	1	2	3	4	9
h. 社会福祉施設.....	1	2	3	4	9
i. 国連.....	1	2	3	4	9
j. 科学技術.....	1	2	3	4	9